

# 「開かれたASEAN+6」による日本再発見 —SENDを核とした国際連携人材育成

安里和晃

京都大学大学院文学研究科/アジア研究教育ユニット・特定准教授

ジョン・ランビーノ

京都大学大学院経済学研究科/アジア研究教育ユニット・特定助教

佐々木幸喜

京都大学アジア研究教育ユニット(国際交流センター付)・特定助教

平成26年2月13日(木)

於百周年時計台記念館 国際交流ホール

# 構想の目的・概要及び参画組織

グローバルとローカルの複眼的知性と現地感覚を備え、新たな視角から「日本とアジアを再発見」して、その課題解決への提案と実践できる能力を有したリーダーを養成する。

## ◆ 段階的包括的国際連携モデル

- ・ **多文化理解交流教育および短期SEND**: 学部段階ではきっかけ、気づき、発見を主たる目的とした複言語教育、多文化理解交流教育と短期SENDプログラムを実施
- ・ **国際連携専門教育および短期・長期SENDとその準備教育**: 学部3・4 回生から修士課程を主な対象として、学生・教員のエクステンジ、招聘教員による授業と単位認定などにより、グローバル水準の専門能力を身につけるコースワークを提供。長期SENDのトレーニングとして日本語教育法、「京都で学ぶアジアと日本」科目を履修。
- ・ **国際連携研究指導および長期SEND**: 大学院では博士論文の国際共同指導を実施すると共に、日本語指導補助、日本・アジア研究教育等を行う長期SENDを実施。修了生は、グローバルな視野と現地感覚を備えたアジアのリーダーとして育成される。



# 現状と成果：質を伴った魅力的な大学間交流枠組み

1. 平成24年12月：本構想を担当する主体として、学内部局横断組織（9部局）である**アジア研究教育ユニット**（文化・社会・経済・環境の4部門構成）および支援室を設置して事業を推進。
2. 平成26年1月：「ASEAN+6」地域等の大学・研究機関との連携充実を目的とした**アジア研究国際コンソーシアム**（Kyoto International Consortium for Asian Studies (KICAS)）を結成（結成日に17カ国22大学の教員がメンバー登録）。
3. **系統講義「京都で学ぶアジアと日本」**の科目群の充実化。派遣前予備教育や外国人受入れ対応の授業科目を新設・増設。系統講義は京都大学の国際戦略の1つに採用。→今後も系統講義科目群の体系化を一層進め、修了証発行を検討。
4. グローバルな体験を経て日本を「再発見」し、専門家となるためのSENDを含む派遣プログラムを実施。**学部、大学院レベルで双方向交流・短期交流プログラム**が多数実現。また、ワークショップ・集中講義などの形式で、連携先大学学生の京都訪問の促進に努めた。

# 現状と成果：質を伴った魅力的な大学間交流枠組み

5. 大学院博士課程共同指導体制：ネパールサンスクリット大学・北京外国語大学・チュラロンコーン大学・ハワイ大学・ハイデルベルク大学・復旦大学などからの**博士課程院生受け入れ**。
6. 質の保証を伴う大学間交流の枠組み形成のため、(a)単位互換制度の実質化。タマサート大学・中国人民大学と、**指定された科目の単位相互承認の枠組み構築**。(b)国際連携博士課程研究指導を実施。特に、ECTSの参照など共通教育フレームワーク形成のため、ハイデルベルク大学比較文化研究センターおよび日本・ヨーロッパ研究クラスターと本学文学研究科・経済学研究科との間で**学生交流協定を締結**。単位互換の具体的手続きについて定めた。
7. 本学学生の海外派遣を、25事業で実施。**SEND準備の講義を新設**し、派遣予定者には積極的な履修を推奨している。海外からは21大学の学生を受け入れ、**日本の社会・文化と学術動向に関する相互理解を深めた**。
8. 24年度の派遣・受け入れ目標数はそれぞれ16名と20名。実績は90名と6名。受け入れに関しては初年度の調整に時間がかかったことが原因。

# 問題点及び制度上の改正が必要と思われる点

1. 学年暦の違いにより、長期派遣については調整が難航した事例があり、計画を変更して短期派遣とする事例が見られた。アセアンは学年暦を統一することになっているが、今後の単位互換にあたり**学期単位ではない枠組み**も積極的に認める必要がある。
  - たとえば**集中講義やワークショップを導入**し、事業を実施しやすいものとし**双方の単位取得を容易**にした。
2. 他財源を併用することで効果的な事業実施が可能となる一方、個々の財源の制約に注意を払わざるを得ず、事務作業が煩雑化、職員の負担増を招く傾向がある。ゆるやかな運用ができるように改正が望まれる。
3. JASSO留学支援制度により交流が促進された一方、正規留学生に同制度の奨学金を与えられないことは不便であり、各種手続きが簡素化されることが望ましい。また学部学生においては、所得制限を理由として申請できない優秀な学生が散見される。
4. ASEAN地域からの学生の増加により、大学施設利用に関し宗教信仰上の配慮が必要な事例が増加しつつある。活発な交流を維持することは多様な人材に配慮が必要である。



# 事業の事例紹介①

:京都市内小中学校における多様な児童・生徒に対する学習支援とフィリピン政府へのフィードバック

- 概要: **日本では異なる言語文化背景を持つ児童生徒が増加**している。こうした児童生徒の中には日本語や教科学習の困難を抱える者も多い。しかし予算や職員の制約から公的な支援体制は十分ではない。人の移動の活発化に伴いこうした新たな課題が浮上しているが、学校だけではなく、地域内連携が必要であり、さらに**アジアの共通課題**として送り出し国も含め国家を超えた連携が求められる。本課題はテーマの特性上、大学が関わる意義を有する。アジア研究、移民研究、エスニシティ、ジェンダー、階層、質的調査法、プレゼンテーションなどの観点から教育効果も大きい。
- 単位:なし。修了証はフィリピン政府在外フィリピン人委員会が発行。

# 事業の進め方： アジア域内の課題にどう向き合うか

日本

京都大学アジア研究教育  
ユニット  
事業提案と実施  
(授業)

学生ボランティア派遣  
2013年10月から14年2月

京都市内の小中学校  
教育委員会

学生派遣  
・渡航前研修の実施  
2014年1月14日～21日  
・テーマに従ったフィー  
ルドワーク

職員招聘  
2013年10月  
・特別講義  
・共同調査

学生訪問

フィリピン

移民 (配偶者)  
(ティーンエイジ)  
(一般)

フィリピン政府在外フィリピン人  
委員会

渡航前研修の実施

フィリピン大学アジアセンター  
NGOs  
アジア開発銀行

# 研修日程



|       | 時間帯   | 活動内容  |
|-------|-------|---|
| 1月14日 | 10:00 | 出国→到着後ホテルへ  |
|       | 17:00 | ホテル周辺散策   |
| 1月15日 | 10:00 | 在外フィリピン人委員会にて施設案内   |
|       | 12:00 | 昼食兼オリエンテーション  |
|       | 14:00 | <b>Guidance&amp;Counseling program に参加</b>                    |
|       | 16:30 | Kanlugan sa Er-Ma Ministry (NGO)                              |
|       | 19:00 | デイケアセンター見学  |
| 1月16日 | 9:10  | アジア開発銀行見学   |
|       | 10:30 | Dr.Sugiyartoと面会   |
|       | 14:00 | <b>PDOS &amp; Japan Peer session を実施</b>                      |
|       | 16:30 | Day Center、貧困地域2か所訪問  |
| 1月17日 | 10:00 | 国立博物館見学   |
|       | 14:00 | <b>Guidance&amp;Counseling programを实施</b>                     |
|       | 16:15 | Development Action for Women Network (NGO)                    |
| 1月18日 | 10:00 | <b>Guidance &amp; Counseling session for on-hold casesを实施</b> |
|       | 12:00 | 線路沿いのinformal sector訪問  |
|       | 16:00 | フィリピン大学にて授業に参加  |
|       | 18:30 | 米野教授と夕食   |
| 1月19日 | 12:00 | イスラム教徒集住地区、ゴールデンモスク、イントラムロス、サンチャゴ要塞等見学                        |
| 1月20日 | 10:00 | <b>On-hold cases special sessionを实施</b>                       |
|       | 14:00 | <b>Guidance &amp; Counseling programを实施</b>                   |
|       | 15:15 | <b>Guidance &amp; Counseling programを实施</b>                   |
|       | 18:00 | <b>カウンセラー職員の前で発表。修了証の授与</b>                                   |
| 1月21日 |       | 帰国  |

## アジア開発銀行





# 渡航前研修の実施： テーマ：社会的孤立を防ぐために



職員に対する研修



宗教と年中行事



教育制度



公共施設



長官との面談



コミュニケーション



日本食とマナー

# 成果と課題

- 多文化社会のもつ具体的な感覚を原点としつつ、対アジアではなく、私たちの共通課題として多文化の課題を認識しコミットできる。
- 学術、教育、政府機関、国際機関、市民団体など多様な接点を持つことができる
- 何度も繰り返してプレゼンを行うため、自身の発表スタイルが確立し、英語プレゼンの自信がつく。
- 調整が多方面にわたる。
- 綿密さの一方柔軟性が求められる。
- 学生の就職活動などの配慮が必要。
- 質的調査にもとづく社会学や関連領域における理論的貢献まで事業を昇華させること。



# 事業の事例紹介②:

## タイ高等教育・研究機関とのパートナーシップ

### 京都大学経済学経済学研究科・タイ高等教育・研究機関との パートナーシップの経緯

- パートナーシップのカウンターパート探しを目的とするタイ派遣  
(2013年2月26日～3月2日)
- タマサート大学国際学部との学術交流協定の締結(2013年8月13日)
- チュラロンコーン大学経済学部との学術交流協定の締結  
(2013年8月14日)
- 京都大学修士学生向けのタイ・フィールド調査の実施、タマサート大学・チェンマイ大学  
レクチャー受講(2013年8月12～8月23日)
- 京都大学経済学研究科教員がタマサート大学国際学部に出講  
(2013年11月30日)
- タマサート大学経済学部との学術交流協定の締結(2013年12月3日)
- タマサート大学国際学部・経済学部修士学生が京都大学経済学研究科で交換留学  
(2013年12月3日～2014年2月6日)
- 京都大学経済学研究科でチュラロンコーン大学経済学部と共催教員ワークショップ(12  
月9日)



# パートナーシップのカウンターパート探し目的とするタイ派遣(2013年2月26日～3月2日)

- 派遣団5名内教職員2名、学生3名(日本人学生2名、タイ人留学生1名)
- 訪問先はタマサート大学国際学部、同大学経済学部、チュラロンコーン大学人口学部、同大学経済学部、盤谷日本人商工会議所、日本学生支援機構、日本学術振興会

## 京都大学経済学研究科が締結した部局間学術交流協定

- タマサート大学国際学部(2013年8月13日)
- チュラロンコーン大学経済学部(2013年8月14日)
- タマサート大学経済学部(2013年12月3日)



# 京都大学学生に適したタイ・フィールド調査の実施(2013年8月12日～8月23日)

- 参加者は13名内教員3名、学生10名
- タマサート大学、チェンマイ大学にてレクチュア受講(講師は元タイ国会議長、元外務大臣をはじめとするタマサート大学・チェンマイ大学教員)
- タマサート大学にて学生ジョイント・ワークショップ開催
- タイ・コングロマリット見学、大手日系企業工場見学
- 国会見学、タイ商務省国際貿易振興局北部事務所
- 農村見学、文化遺産見学





# タマサート大学国際学部・経済学部学生が京都大学経済学研究科への 交換留学生として来日

(2013年12月3日～2014年2月6日)

- タマサート大学国際学部3名、同大学経済学部1名
- 航空券、生活支援費の提供
- 集中講義4科目
- 国内フィールド調査への参加(滋賀県、奈良県)



## 京都大学経済学研究科教員がタマサート大学国際学部に出講 (2013年11月30日)

- 受講者10名



## 京都大学経済学研究科でチューラーロンコーン大学経済学部と 共催教員ワークショップを実施(2013年12月9日)

- 両大学教員参加者22名、報告者8名



## 2014年度にタマサート大学教員を京都大学経済学研究科 集中講義講師として招へい予定

- 招へい教員1名～2名



## タイ高等教育・研究機関とのパートナーシップの特徴

- 学術交流協定の締結
- 教職員間交流
- 教員・学生間交流
- 学生間交流

## タイ高等教育・研究機関とのパートナーシップの意義

- 次世代を担う若者同士の交流、お互いの国へ興味・関心・理解の深化
- 専門家および国際人材の育成
- タイなど東南アジアにおける現地での体験に基づいた知識の涵養



# 事業の事例紹介③:

## SENDプログラム



# SENDプログラムに関する教育実践

- ① 【語学・文化講座】 現地の言語や文化の学習
- ② 【実地研修】 史跡見学や文化体験 ←①と組み合わせられた形での開講
- ③ 【**共同学習**】 日本文化紹介や日本語指導支援などの活動

ASEAN地域を始めとする世界各地と日本との架け橋となる



エキスパート人材へ

2013年度、国際交流センターでは**2週間**の短期派遣プログラムを実施

→チュラロンコーン大学（タイ）・ハノイ国家大学（ベトナム）

# 派遣準備講座

## チュラロンコーン大学

- 語学講座【8/5～8/9】  
文字や発音、声調、挨拶表現  
→ボイスレコーダーによるフォロー・アップ

- 発表準備  
【7/19、7/31、8/8、8/21、8/23】

- ①1班あたり10名程度  
(チュラ大生9～11名、京大生1名)
- ②発表テーマや資料の紹介についての情報交換を、FacebookなどのSNSを通じて行わせた。

## ハノイ国家大学

- 語学講座【8/5～8/9】  
発音、声調、挨拶表現  
→ボイスレコーダーによるフォロー・アップ

- 発表準備  
【7/24、8/9、8/21、8/22】

- ①人文社会科学大学、外国語大学
- ②フィールドワーク（京町家見学・茶道体験・武道センター見学）を通じた伝統文化の理解

# 派遣準備講座【成果と課題】

- 出席率・受講態度ともに**良好**
- 語学・文化学習に対する意欲の高さ  
→ 京都大学に在籍する**留学生との**  
**交流の機会を増やすこと**
- △ 講師の確保、学内での連携  
→ 研究科・研究所の開講**講義への参加許可の打診**





# 研修内容

## チュラロンコーン大学

### 【語学講座】

- ・ 「Intensiveタイ語」

### 【教室活動（聴講・共同参加）】

- ・ 特別講義、BALAC  
(≒KUINEP)、  
日本語講座の授業、**共同発表**

### 【実地研修】 ※歴史と伝統

- ・ アユタヤ遺跡  
ラッタナーコシン歴史展示館

## ハノイ国家大学

### 【語学・文化講座】

- ・ 語学：テキスト2冊を使用
- ・ 文化：担当教員による紹介

### 【教室活動（共同参加）】

- ・ 日本語クラス（外国語大学東洋言語文化学部、附属外国語英才高等学校）の授業、**相互学習**

### 【実地研修】 ※都市計画、伝統工芸

- ・ 旧市街、タンロン遺跡  
バッチャン工芸村

# 共同発表・相互学習

- ① チュラ大生＝日本語専攻2年次の学生
- ② (京大生1名＋チュラ大生9～11名) × 5班

## チュラロンコーン大学



↓ 打ち合わせ (図書館 [談話スペース])



↑ 発表当日の最終打ち合わせ



↓ 発表当日



# 相互学習・共同発表

- ① 人文大生 = 日本学専攻 2 ~ 4 年次 /  
外大生 = 2 年次 (午前) 3・4 年次 (午後)
- ② 1 名ずつの発表 + グループディスカッション

## ハノイ国家大学 (左・中: 人文社会科学大学 / 右: 外国語大学)



↑ 実食 (梅干)



↑ 実演 (合気道)

↓ 実食 (ベトナム伝統料理)



↑ グループディスカッション①

↓ グループディスカッション②



# 成果と課題

## チュラロンコーン大学

### ○ 派遣準備講座

- ・ 打ち合わせ：SNS→学内

### ○ 双方向交流の基盤形成

### △ 試験時期との兼ね合い

- ・ 参加学生の決定を早める。  
⇒ 研修前の準備期間を長く設ける。

## ハノイ国家大学

### ○ 全学共通科目

「日本語・日本文化演習」との連携

### ○ 発表の機会2回

- ・ 時間配分や使用語彙の精査

### ○ 双方向交流の基盤形成

### △ 共同発表学生の決定時期

- ・ 打ち合わせの開始を早める。  
⇒ 対応を柔軟にする。

## 《 学生たちに見られた成果 》

- ① 【共同学習】 ⇒ ファシリテーター・リーダー養成の一助
- ② 【語学・文化講座】 【実地研修】 ⇒ 自他、両文化に対する気づき
- ③ 【研修全体】 ⇒ ①+②+長期留学プログラムへの動機づけ